

## 超級レベルにおける意見叙述・仮説抽出法：問題点と対策

渡辺素和子

ポートランド州立大学

### 要旨

超級レベルの主要な機能は、意見叙述と仮説であるが、その抽出手順は、ワークショップ中の時間不足、モデルの具体例不足、超級話者の少なさなどが理由で、資格候補者やテスターにとって、難しいとされている。本稿では、意見叙述・仮説の引き出し方の問題点を、トレーナーの経験に基づいて指摘し、対応策、練習方法を紹介する。

【キーワード】超級、意見叙述、仮説、トリプルパンチ

### 1. はじめに

OPI 試験官養成ワークショップを受け、練習ラウンド、資格認定ラウンドの過程を経験した人がほとんどの場合ぶつかる壁は、超級の意見叙述と仮定の発話を抽出することでしょう。もちろんそれぞれの主要レベルごとに難しさはありますが、超級の意見叙述・仮定は、ワークショップ中でもあまり割り当てられる時間がないので、どうしてもマニュアルに書かれていることを読んで、口頭で説明される程度にとどまってしまうがちです。また、ワークショップ中に練習する機会も少ないため、十分に具体例を聞くこともなく練習ラウンドを迎えてしまいます。さらに、練習ラウンドや資格認定ラウンドでは、目標の意見叙述と仮定の抽出方法が不明瞭なままインタビューに臨まなくてはいけないので、結果的に納得のいかないものに終わることが多いようです。その上、超級の被験者もそうざらにいるわけでもないのに、失敗からの手応えがあったとしても、次にそれを生かす頃には、また感覚が鈍くなっているという悪循環もあるようです。

本稿では、当トレーナーが今までに練習ラウンドや資格認定ラウンドの OPI を査定した中でよく見られる失敗、そして、よく書くコメントを基に、失敗の原因、または、なぜ非効果的だと判断されるのかを解明した上で、超級のトリプルパンチの手順を説明し、インタビュー技術の向上のための対応策や、練習方法を紹介したいと思います。

### 2. 超級レベルでの抽出法の問題点

意見叙述・仮説を抽出するのがなぜ難しいかを考察すると、大きく分けて、四つの問題点が挙げられます。第一点は、話題の取り上げ方に無理があり、それが原因でうまく意見叙述が出ないということです。第二点は、意見叙述をさせるテスターの質問の仕方に問題がある場合です。第三点としては、上級から超級への移行がはっきりせず、終始同じ調子でインタビューが進められていることが原因で、明白に抽出したことが表れていないことに問題がある場合があります。そして、最後に、反論の仕方に問題があるという点です。以下に問題点 1 から 4 を例に示して解説していきます。

## 2-1 問題点 1 : 話題の拾い方

しばしば、上級の「一般的な人々が関心を寄せる話題 (Topics of general interest)」を話していたかと思うと、いつのまにかテストから難題をふっかけられて、被験者が追いつめられているという状態に移行していることがあります。次の例 1 と 2 では、被験者は、上級レベルで少子化の問題について語っています。

### 例 1

被験者 将来子どもが少ないということは、やっぱり、今の大人たちが年寄りになった時に、その生活を保証してくれる若者がいなくなるということで、今日本では大きな問題になっているみたいですね。

テスト あー、なるほどね、そうですねー。じゃあ、今若い人たちからたくさん税金や保険金をとって高齢化社会を支えて行こうというやり方は、どう思いますか。賛成ですか。

### 例 2

被験者 将来子どもが少ないということは、やっぱり、今の大人たちが年寄りになった時に、その生活を保証してくれる若者がいなくなるということで、今日本では大きな問題になっているみたいですね。

テスト あー、なるほど、やっぱりねー。でも、あれじゃないですか、やっぱり、若者に年寄りの世話を負わせるというのは、不公平なんじゃないでしょうか。(反対する口調で)

例 1 の場合、被験者が上級レベルで説明しているのに対し、テストは、その会話の延長線上に超級の話題をふっています。このような聞き方の欠点は、被験者は、一般的な話題ではあるものの、具体的なレベルで詳述することを期待されている上級の土俵にいるのに、知らない間に、もっと抽象的な超級レベルに土俵が変わってしまったことです。超級レベルで期待されている抽象性（さらに一般的な視野で問題を語るといった意味での抽象性）について、被験者は認識しておらず、多くの場合、具体的な例を示したり、雑談的な形で考えを述べたりしてしまいます。その結果、超級レベルのような抽象性に欠けている発話におちいってしまうのです。

例 2 の場合は、被験者が上級のレベルで、少子化という社会問題を「説明」していたのに対し、テストが「反論」してしまったものです。これでは、被験者がまだ意見を述べていないので、被験者の意見叙述の能力は測れません。

## 2-2 問題点 2 : 意見の求め方

練習ラウンド、資格認定ラウンドを査定していて再三繰り返すのが、「どう思いますか。」という決まり文句に頼らないというコメントです。多くの資格認定候補者は、取り上げた話題についてどのように議論にもっていくかということにエネルギーを使ってしまい、質問の文末にくると、「～について、どう思われますか。」と終わってしまいます。「どう思う

か」と聞かれた場合、被験者は、いろいろな解釈をして、いろいろな機能で返答してしまいます。たとえば、ある事件について、自分なりの解釈を施すとか、ある社会問題の行く末・見通しを語るなど、千差万別です。次の例3では、公共の場における全面禁煙が論点ですが、被験者の返答は少しずれを生じています。

### 例3

テスター 東京の一部の地域では、歩道などでも禁煙となっておりますけど、ああいった公共の場で全面的に禁煙にするということについてどう思いますか。

被験者 ああ、私なんかたばこ吸わないから、とてもいいことだと思いますね。私の国では、ああいうふうに全面的に禁煙にするということは、まだまだ難しいと思います、やっぱり、たばこはまだみんな当たり前だし、かっこいいと思っている人が多いですから。

例3のように、被験者は、ある考えを述べていますが、意見叙述としては、非常に判断しにくい発話になってしまっています。まず、「いいことだと思います。」という部分では、提示された、公共の場での全面禁煙という議題について、賛成する立場をとっていますが、残念ながら、次にくる発話の部分は、自国の禁煙事情を説明するもので、全面禁煙賛成の立場を裏付けるものではありません。したがって、裏付けのない意見を言ったこととなります。また、「私の国では」の部分では、被験者の国での公共の場での全面禁煙は困難であるという意見を述べています。これについては、喫煙を肯定する（「当たり前」）一般社会の価値観という裏付けがあります。そうすると、もともとテスターが提示した、公共の場での全面禁煙は正当か否かという議題ではなく、被験者の国での全面禁煙が可能であるか否かという議題にすり替わってしまっている訳です。このように、いつのまにか議題をすり替えられているために、テスター側が反論に窮する、といった例をしばしば耳にします。

## 2-3 問題点3：抽象的な話題を雑談的な会話で進める

被験者が超級の機能を達成したかどうかの判断がむずかしいという次の原因は、雑談的に抽象的な話題を話すことで終わってしまった場合です。お茶の間のリラックスした雰囲気、ワイドショーから流れて来るような話題について、みんなと雑談をするといった形で話が進んでいくので、第三者が聞いた場合、意見の組み立てや反論の所在が不明瞭になってしまいます。マニュアルの141ページにある **Supported opinion** (裏付け・根拠のある意見) の定義にも、「OPIで裏付けのある意見を抽出するために試験官には、丁寧ではあるが、反論もしくは立場の違う意見を提出する役割を演じる必要がある。」と書かれています。例4を見てみましょう。扱っている話題は、CO2排出量問題ときわめて抽象性が高いのですが、雑談のように進んでいます。

### 例4

テスター 二酸化炭素排出制限については、先進国と新興国との間でもめているようですが、先進国は、もっと歩みよるべきだと思いますか。

- 被験者            そうなんですよね。あれもむずかしい問題で、先進国は、今までたくさんガスを排出してきて、それが原因で今地球が温暖化になっているんですから、やっぱり新興国に同じことを要求するのはよくないと思いますね。
- テスター            そうですよ。やっぱり、今までのことがありますからね。新興国にしてみれば、これから発展していこう、国が栄えようっていう時に、いきなり制限を課せられては不公平だと思うでしょうねえ。
- 被験者            うん、だから、新興国側が反対するのも無理はないと思いますよ。

例4では、テスターが被験者の意見に迎合してしまい、まるで、インタビュー番組のインタビューが、協力的に会話を進めていくような調子になっています。また、その協力的な姿勢は、「そうですよね」「やっぱり」といった発話や、被験者の発話内容を補足するような発話（新興国としては不公平）に表れています。

試験官養成用マニュアル p.60 に、超級レベルにおける試験官の態度について、「あまり親しそうにふるまわないこと。もっと改まった態度をとること。... 丁重ではあるが、対立的な態度をとること」と書かれています。OPI は、あくまで言語能力のテストですから、被験者の意見には、もっと客観的に反応してもいいでしょう。もちろん、初級や中級レベルでは、テスターが被験者に関心のあることを前面に出して接する必要があります。ところが、超級で同じような態度で臨むと、相手は、「仲間」「立場を同じくする同志」と社会風刺談義に興ずるといった姿勢で会話に参加し、ガイドラインに規定された意見叙述とは異なる発話になってしまいます。これでは、逆効果です。「被験者の話題に興味を示す」ことはいいと思いますが、そのことと、「被験者の言った内容にのめり込んで、同調する」こととは違います。テスターは、超級レベルに移行したら、中立的な立場を保つといった意味での改まった態度で臨む必要があるでしょう。

#### 2-4 問題点4：反論のしかた

時々、意見の叙述は出たものの、次のテスターの反論の仕方が、前記の例2のように、批判的な口調になっていたり、テスター本人の視点から反論したりしている場合があります。そのような批判的な口調・論調にもかかわらず、被験者たちはきちんと返答することが多いので、この問題に関しては、トレーナーの視点で特に発話の判定ができないという問題はありません。しかし、問題点2と同様に、中立的な立場を保っていないという問題点があります。これは、テスター・被験者間に、年齢、男女差、社会的地位といったステータスの差が存在する場合に影響が出てきます。例えば、テスターが、教師で、被験者が学生の場合、直接習っている教師ではなくても、目上である教師に批判されて、それに対して、反論をしてはいけないと思い、自分の初めの意見を変えてしまう可能性もあります。反論に応じない場合、被験者の言語能力不足が原因なのか、それとも、察し・思いやりが原因なのか、不明なので、機能を果たしたかどうか判定できなくなります。

以上、この項では、超級レベルの特に意見叙述の抽出方法の問題点として、話題の拾い

方、意見の求め方、対話への臨み方、そして、反論の仕方、この四つの項目において問題のあることを指摘しました。

### 3. トリプルパンチ再確認

超級レベルの意見叙述・仮定の抽出法として、トリプルパンチが推奨されています。このトリプルパンチは、必須ではないにしても、意見叙述・仮定の発話を引き出す効果的な方法として、多くのトレーナーから支持されています。以下にマニュアルでの説明を引用します。

最初に	上級レベルで十分に展開（叙述／描写）された話題について、裏付けのある意見を求める突き上げなどによって、質問を上級レベルかららせん状に（具体的な内容から抽象的なものへと移ることで）進めること。
続いて	被験者の意見に反対してみる—わざと難癖をつけるなどして、述べられた意見に反論する役を演じる。
それから	ひとまとまりの裏付けのある意見についての一連の発話から、仮説を打ち立てる。被験者が複数の結末について詳述せざるを得なくなるような形で、仮説を要求する。 (牧野 1999:60)

「トリプル」というその名が示す通り、この手法は三段階に分かれています。厳密に言うと、もう一つの予備段階があることを指摘したいと思います。前記の「最初に」の段階ですが、プレリュード（「前奏」あるいは、スポーツの比喻を使うと「助走」）があって、それから、意見を求める質問がきます。ですから、トリプルパンチの段階を次のように考えれば、分かりやすいのではないかと思います。

トリプルパンチ

プレリュード 準備段階（前奏・助走）

意見叙述 意見を述べる

反論 対立する立場を提示し、反論させる

仮説 現実とは異なる仮定の状況で論理を展開させる

各段階について、詳述します。

#### 3-1 プレリュード：上級から話題を拾い、プレリュードに持っていく

まず、上級のレベルで、描写に含まれる「説明」を目標に、社会問題や報道されている

話題について被験者から話題を引き出して、それについて、説明をさせます。そこで、上級が固まったことが確認できたら、その話題をもう少し語らせましょう。例えば、「それが問題となっているのは、どうしてなのでしょう。」「それについて、一般の反応は?」「政府・社会の対応はどんなことがなされていますか。」などと聞いて、今語られている話題の根本にある問題点、背景、原因などを探ります。この際、被験者から材料を提供してもらうのが目的です。例えば、ある政治家の汚職事件があったとします。その汚職事件の内容について、どのような事件だったかの事実関係を説明させるまでは、上級の確認になりますが、そのあと、「じゃあ、今、その事件について、マスコミとか一般の人たちが関心を寄せている部分というのは、どういうところにあるんですか。」「どうして、こういうような事件が起こった(または、起こる)と思いますか。」などと聞き、被験者に話題をさらに掘り下げるようにさせます。これをするによって、テスターは、二極に分かれるような論点がないか頭の中で整理します。

### 3-2 意見叙述：意見の叙述を求める

上級の話から発展させたプレリュードから、賛否を分ける論点を見だし、それら二つの立場を提示した上で、どちらかの立場を取らせ、意見を述べさせます。前項の汚職事件の例で、被験者から、「公設秘書が起訴された場合、その秘書を使っていた政治家は、責任を負って辞職しないのか」「政治家は裏でいろいろ個人資産を持っていて、結局選挙でお金が必要だから」などという発話があったとしたら、「本人が訴追されなくても秘書が起訴された場合は、潔く辞職するべきか、否か」「政治家は、個人資産を一般公開するべきか・公の立場にあると言えどもプライバシーは守られるべきか」などのような賛否両論分かれる論点を拾い上げて、提示します。

この際、「具体的な内容から抽象的なものへと移る」ということは、もちろん、重要なのですが、抽象的なものへ移る際に、つい陥ってしまう質問の台詞が、第二項で述べたように、「～について、どう思いますか。」という質問型です。この聞き方の問題点は、「どう思う」の解釈が、非常に多種多様で、必ずしも目標とする裏付けのある意見の叙述にならないことがある点です。

例えば、「～についてどう思いますか。」と聞かれた場合、ワイドショーに出演している評論家たちの話のような「評論・評価・批判」、映画や小説などについて発するような主観的な「感想」、「将来の展望」「自分なりの解釈・見解」などが出て来るかもしれません。さらに、そのあとの問題となるのは、それらの「評論等」「感想」「将来の展望」「解釈・見解」に対して、反論すると、とかく個人攻撃のように聞こえるような「批判」になってしまう点です。例えば、感想として、ある政治家の行った行為について、「立派なことだ」という感想を述べたことに対して、「でも、他の面で悪影響などが出たりして、立派だとは言えないのでは?」と反論した場合、被験者の人格を批判しているように聞こえてしまうこともあります。または、そもそも、反論のできないような内容が出てきたりすることもあります。例えば、出来事の顛末についての個人的な見通し(例「みんなも続投した方がいいって言うてるし、続けるんじゃないかと思いますね。」)が出てきた場合は、反論に窮してしまうこともあります。

### 3-3 反論：反論を提示し、それについて反論させる

被験者が、一つの立場を取って、理由とともに意見を述べたら、次に、テストは、反論を提示します。この際、重要なことは、批判的な口調、個人攻撃にならないことです。批判的な口調は、よくテレビで見られる討論番組や評論家を勢揃いさせてお互いの見解に「難癖」をつけるといった口調のことです。あのような口調だと、どうしても感情を逆撫でてしまい、客観性を失ってしまいます。「反論する」のではなく、あくまでも反論を「提示する」のですから、客観的に行いましょう。時々、練習ラウンドの OPI を聞いていて、耳にするのは、「ただ、そういう考えは、〇〇なんじゃないんですか。」というように、直接被験者に、テスト自身が反論しているやり方です。反論は、反対の立場をとっている人たちの考えで、それをテストは「提示」するのみです。ですから、「〇〇という考えの人もいますが、それについては、どうでしょう。」というように話すと、客観性および中立的立場を失わずにすむと思います。

### 3-4 仮説：仮説的ないくつかの状況・展開について述べさせる

プレリユード、意見、反論と来て、最後は、仮説です。この仮説も、なかなか思うように出しにくく、苦勞されている方も多いようです。マニュアルの定義では、仮説は、次のように定義されています。

Hypothesis (仮説・仮定)：因果関係および理由付けや論証の根拠を示すといったことを長い談話の形で説明しながら、事実と異なる状況や想定される一連の状況を表現できる能力。(牧野他 1999:140)

仮説を確認する際にまずしなければいけないことは、現状、つまり現時点で何が現実として行われていることなのかを把握することです。その現状(例「金で政治が動く」)を基に、現状の裏にある仮定の状況(例「金で政治は動かない」)を提示します。そして、その仮定の状況で、どのように事象が発展、展開するかを述べてもらいます。前出の汚職事件の展開からは、「もし汚職に関する取り締まりが徹底して、お金で政治家を動かさないような社会になったら、企業や地方有権者の考え方、または、政治家たちの資質についての考え方はどのように変わると思いますか。」「国会議員や地方自治体の議員などの年収や個人資産が一般公開されて、だれでも検索すれば〇〇さんの年収がわかってしまうというような時代がきたとしたら、そのような情報を知ることによって、有権者の意識とか政治参加などについて、どのような変化がもたらされると思いますか。」といった例が考えられます。

ここで、留意したいのは、仮定質問の後半の部分、特に「〇〇がどうなるか」の「〇〇が」の部分です。前出の例にもあるように、ただ大雑把に「もしそれが実現したら、どうなると思いますか。」と聞いたのでは、「そうになったらおもしろいでしょうね。」などと簡単に逃げられてしまいます。仮定の状況に立った上で論理、議論を展開してもらうために、仮定状況のいくつかの側面に焦点を当ててあげると、被験者も展開がしやすいようです。その

いくつかの側面とは、もちろん、話題と論点にもよりますが、社会の価値観、人々の考え方、制度、考慮に入れる要因など様々な例があります。そういった側面にどのような変化、影響、効果があるのかを架空の状況を想像して述べてもらおうと、仮説の能力がより効果的に出て来るようです。

第三節では、トリプルパンチを詳しく例を用いながら復習しました。次の節では、トリプルパンチの練習法を紹介します。

#### 4. トリプルパンチ練習法

##### 4-1 論点の抽出

まず、新聞やテレビのニュース番組で話題となっている問題から、賛否両論分かれる論点を探します。見出しなどを利用して、直感的に論点を考えたり、または、記事を熟読したりしたあと、その内容から、問題点を拾い上げてみましょう。

例えば、次のような見出し、話題があった場合、どのような対立する問題点が思い浮かびますか。

朝青龍引退

事業仕分け作業の問題

子ども手当給付金

介護士・介護施設不足

二極対立する問題点を考える時、「～した方がいい・しない方がいい」「～するべきだ・～するべきではない」「効果的だ・非効果的だ」などといった文末を利用すると二つの立場をいいやすくなるようです。

朝青龍を続けさせるべきだった・辞めさせてよかった

事業仕分けは、無駄の削減に効果があった・実際の効果はない

子ども手当給付金は少子化問題の解決に効果あり・効果なし

外国人労働者を受け入れるのはいいことだ・その制度には不備な点が多い

このように、それぞれの論点の賛成の立場と反対の立場をきちんと自分の口で言えるように、書くなどして、練習をしておきましょう。

##### 4-2 反論の練習

次に、それぞれの立場を支持する理由、論拠を考えます。例えば、ここでは、朝青龍の問題について、両方の立場についての論拠を挙げてみます。

朝青龍を続けさせるべきだった

→横綱が二人いることの意義、優勝回数などの成績、相撲人気の支え

辞めさせてよかった

→刑事事件のようなものを起こした責任の重さ、横綱としての品格の欠落、将来品格を備える可能性の低さ

それぞれの立場についての論拠を考えたあと、イメージトレーニングのように、被験者が一つの立場をとったことを想定し、どのように反論を提示するか練習してみます。例えば、被験者が「朝青龍を続けさせるべきだった」という意見を言ったとすると、その後の反論は、「辞めさせてよかった」という立場から一つか二つの論拠を取り上げて、「そうですね。それから、また反対の考えの人もいて、やはり暴力事件といった問題を起こした人は、横綱の品格を損なうということで、辞めさせるのは妥当な判断だったとする人もいますが、そういった立場に対して、どう反論しますか。」というようになります。この組み合わせの練習が終わったら、次は、立場を反対にして、同じように反論の練習をしましょう。

#### 4-3 仮説・仮定質問への発展

反論の練習の次は、仮説・仮定を引き出すような質問を作る練習です。仮説・仮定を引き出すには、対立する各立場を支える論拠を発展させることが必要です。ですから、まず、論点について、対立する立場の論拠を書き出したあと、被験者の立場にたって、実際に口頭で一つの立場を支持する練習をしてみてください。そうすると、そこからさらに展開される、副産物的な論点や問題点が見えてきます。以下に例を示します。

##### 【朝青龍問題】

- 横綱としての品格→ 品格を伝え、養成していく中で、相撲協会、理事会、マスコミ、相撲ファンたちは、どのような対応をしていったらいいか。
- 相撲人気の低迷→ これからの相撲界の行く末は。

##### 【事業仕分け作業問題】

- 公共事業削減による景気の低迷→ 無駄の削減が異常に進んでいったとして、それは、地方自治体や経済にどのような影響を及ぼすか。
- 官僚支配型の政治→ 官僚まかせではない政治が発展していったら、政治家に求められる資質や能力は、従来のものとどのように異なるだろうか。

##### 【子ども手当給付金】

- お金のばらまきの対策→ この給付金制度が本当に少子化の歯止めとなるためには、政府は他にどのような対策をとらなければいけないか。また、どのようなことを考慮に入れてこの制度を実施すべきか。

##### 【外国人労働者受け入れ】

- 言語の問題→ 言語の壁を克服するには、試験制度や受け入れ団体としては、どのような対策をとったらいいか。
- 日本社会の受け入れ態勢→ 日本人の外国人に対する考え方にどのような変化が起こらなければならないか。または、このまま受け入れが進んだとして、20年後、50年後の日本社会（の介護の現場）は、

どのような社会になっているか。

さらに、仮説・仮定の抽出を成功させるポイントは、被験者が脱線した場合、フォローアップでいかに軌道修正するかということです。例えば、「どのような対応をするべきだと思いますか。」という質問に、被験者は、意見を聞かれていると思って、「〇〇をするべきだ・〇〇した方がいいと思います。」で終わってしまうことがあります。あるいは、希望、願望を言うだけに終わる場合もあります。そのような時は、すかさず、「では、その〇〇が実現したら、どのように変わるのでしょうか。」あるいは、「それが実現するためには、いろいろな障害があると思うんですが、そういった障害への対応とかどうしたらいいか、もう少し教えてもらえますか。」などとフォローアップします。そうすることによって、「〇〇という仮定の状況が実現したら、こうなる」「X という問題については、Y という対応をする。そうすれば、こうなる」という、仮定状況に基づいての結末、顛末、予想展開を引き出すことができます。

## 5. 結び

本稿では、超絶レベルの壁である、意見叙述と仮説の抽出方法の問題点、そして、対応策をいくつか紹介しました。OPI は、一つ一つ違う「生もの」ですから、ここに紹介した方法がいつも成功するとは限りませんが、重要なのは、常に声に出して、ここに紹介したような練習方法を実践しておくことだと思います。ニュースを聞いたり新聞を読んだりした時に、脳が超絶レベルで活性化されることを期待しています。

## 注

- (1) 日本語 OPI 研究会 20 周年記念論集に投稿する機会を与えて下さったことに感謝します。
- (2) 本稿での発話例は、実際のものではなく、本トレーナーが自らの経験に基づいて作成したものです。

## 参考文献

牧野成一監修・日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム翻訳 (1999) 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル (1999 年改訂版)』アルク